

生徒・地域とつくる

# これからの 学校

第1回

## 地域“で”学ぶ探究



### “生徒を主語にした”特色・魅力ある教育を

高校進学率は約99%に達し、高校にはさまざまな背景を持つ生徒が在席し、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じた学びの実現が必要とされています。また、産業構造や社会システムの急激な変化、少子化の進行により、教育的機能の維持が困難な地域・学校も生じるなど社会経済の有り様を踏まえた高等学校の在り方の検討も急務です。

こうした背景から、“生徒を主語にした”教育を実現すべく、すべての高校に特色・魅力ある教育の実現が求められています。

### 各高校の特色化・魅力化に向けた事例を紹介

このコーナーでは、各高校がおかれた地域・環境、歴史、生徒の特長などを踏まえてスクール・ポリシーの策定や教育課程の編成を行い、特色ある取り組みを実践する事例をご紹介します。

連載第1回のテーマは、「地域“で”学ぶ探究」。気仙地域の次世代を担う人材の育成を期待され、「大船渡学」を通じて自走して学ぶ生徒を育てる岩手県立大船渡高等学校にお話をうかがいました。



## 地域“で”学ぶ「大船渡学」 興味のあることを通じて、地域の誰かを幸せにする

岩手県立大船渡高等学校 進路副主任 小田島新 先生



Point

- ✓先輩がロールモデル。異学年合同の授業を多数実施
- ✓答えずにとことん自問自答させる「問い出し」システム
- ✓生徒との「対話」で学校の特徴が見えてくる

### “大船渡を学ばない”大船渡学で 気仙地区の次世代を担う人材を育てる

岩手県立大船渡高等学校は、岩手県沿岸南部の気仙地区にある4校の中で、最も規模の大きな普通科進学校だ。気仙地区のいわゆるセンタースクールであり、地域から次の世代の大船渡を作ってほしいとの期待を背負っている。そして、校訓「自主独立」の気概を体現すべく、近年、「探究力」「リーダー」「人間力」を統合的に伸ばすために、「生徒が自ら学びたくなる自走する学び」の実践に取り組んでいる<図表1>。その核となるのが、全校生徒が取り組む、探究学習「大船渡学」である。

「大船渡学」と謳っているが、地域を学ぶことが目的

ではない。地域はあくまでも学びのフィールドであり、その中で生徒自身が本当に学びたいことを見つけ、「生涯を通して真理を求め、自ら主体的に学ぶ力」を獲得することで、将来、新しい知を生み出せる人、社会の事象に対して当事者性を持って対峙し、よりよい未来を創れる人を育てる。大船渡学はそんな教育目標を基に設計されている。

「大船渡学は、当時の進路指導担当だった梨子田喬教諭が2017年度、学校と地域と結ぶ『いわてNPO-NETサポート』理事・事務局長を務める菊池広人さんをプログラム設計者兼ファシリテーター役として招いて立ち上げました。今年で7年目になります」と語るのは、梨子田先生が異動した後、「大船渡学」をけん引する、現進

路副主任の小田島新先生だ。

「最初は、2年生のみを対象とした『地域を知る』学習だったのですが、それだとフィールド調査の発表会や成果物の制作が目的となり、『活動ありきで学びなし』に陥ってしまう。そんな危惧を抱いた梨子田先生が、地域をフィールドとして使い、自分の興味のあることや好きなことをいろいろやっていくことで、

図表1 スクール・ポリシー





家族・友達以外の身近な人や地域の誰かを笑顔にできる  
 といいよね、やりたい学びを見つけることで地域課題の  
 解決にも一役買えるといいよね、という方向にリノベー  
 ションしました。その際に、全学年で取り組む現在の形  
 になったそうです。プログラム内容は毎年少しずつアッ  
 プデートしていますが、方向性にまったくブレはなく、  
 本校ではそうした自己発見の延長線上に進学があり、そ  
 こにつなげていくきっかけの一つとして、大船渡学を位  
 置づけています」

**異学年合同の授業を実施し  
 1年生は2年生の背中を見て学ぶ**

「大船渡学」の授業は、週に1時間の「総合的な探究  
 の時間」で行われる。ファシリテーターが伴走して行う  
 「大船渡学」は1～2年次で取り組み、3年次では主に、

それまでの活動を生かして志望理由書を作成するなど、  
 それぞれの進路に向けた個人の課題研究にシフトする。

同校は前年度までの取り組みを踏まえ、2023年度にお  
 ける授業の強化ポイントを以下の3つに定めた。

- ・「自走力」をより高める
- ・「一次情報」を大切にする ⇒実体験・五感で得られ  
る情報を大切にする
- ・上記のために、ピアサポートや異学年の協力、教員の  
サポートの仕組みをつくる

そのうえで今年度を実施する「大船渡学」の授業内容  
 <図表2>を策定した。最大の特徴は、年間を通じて  
 1・2年生の合同授業を数多く組み込んでいる点だ。

導入編（4月～5月）の授業で最初に取り組むのが、  
 2週に分けて実施される「授業チャレンジ」。8人（2年  
 生4名、1年生4名）で1チームを結成し、まず、2年

**図表2** 2023年度 大船渡学の授業内容とスケジュール (抜粋)

時期	1年生	2年生
4月	オリエンテーション&授業チャレンジ導入	オリエンテーション&授業チャレンジ導入
5月	<合同>2年生授業チャレンジ（大船渡高校で私が一番詳しい知識について、1人20分）	
	<合同>1年生授業チャレンジ（大船渡高校で私が一番詳しい知識について、1人10分）	
6月	—	授業チャレンジふりかえり&アクション導入
	<合同>自分らしい学びとは ～いろいろな探究との向き合い方を共有する～	
	夏休みアクションに向けた導入	—
7月	<合同>夏の陣の導入 ～ゼミでどのように学ぶのか～	
	<合同>教員ゼミプレゼン 教員による私のゼミ10分プレゼン→志望理由書エントリー	
	夏の陣 教員それぞれがゼミを持ち、レクチャー、フィールドワーク、ワークショップをグループ単位で実施	
夏休み	1年生 ロールモデルインタビュー 2年生 「Learning Zone」「Growth Zone」で学びの場を創造する・構築する →必ず、一次情報を得る（自分の五感で学びを得る）活動を実践する	
8月下旬	<合同>夏の陣のゼミ単位で、夏休みのアクションのふりかえり・プレゼン資料作成	
10・11月	探究プランの作成・確認	探究実践プランの作成・確認
	<合同>探究の進捗状況の共有・ブラッシュアップ	
12月	冬の陣 ・哲学対話をやってみる ～そもそもを深める対話の場づくり～ ・課題解決モデルの実践 ～課題とは何か、斜め上の提案づくり～	
冬期間 (10月～随時実践)	1・2年生ともに、自分の世界・可能性をひろげることができるチャレンジの実践（一次情報に触れる） ※必ず地域のパートナーと実践する	
1月	冬のアクションのふりかえり&2月の成果共有へ	冬のアクションのふりかえり&2月の成果共有へ
	そもそもの探究を考える	—
2月	春休みのさらなる探究活動に向けた導入	これまでの探究と志望理由書をつなげる
	各学年の成果共有&ふりかえり	

大船渡高校のHPより (<http://www2.iwate-ed.jp/ofu-h/08-information/ofunatogaku2023.pdf>)



生が1人20分間ずつ、自分の興味関心事（今年度のテーマ：大船渡高校で私が一番詳しい知識を使って授業を実践）について授業を行い、翌週は1年生が1人10分間の授業にチャレンジする。このような異学年合同授業の狙いと意義について、小田島先生はこう解説する。

「入学したばかりの1年生は、大船渡学のコンセプトである、好きなことや興味・関心のあることで探究活動を始めなさいと言われても、自分が本当に好きなことは何か、よくわかっていない生徒がほとんどです。そこで、同じ教室で2年生がプレゼンや授業を行うのを実際に見聞きして、大船渡学はこうしてやるものなのだと学ぶことから始めます。先輩たちの堂々とした姿に圧倒される体験を通して、『すごいな。自分も好きなことが見つかるかな。そもそも自分の本当の興味・関心って何だろう？』と自問自答しながら、その翌週には2年生を前に1年生が授業チャレンジに挑戦します。

一方、前年度に同じ体験をした2年生は、今度は1年生を引っ張っていく立場となるので、『この話し方だと、初めて聞く1年生には理解できないのか』とか、『じゃあ、もっと丁寧に教えないといけないな』など、いろいろな“気づき”を得ます。そんなふうに、この授業チャレンジによって、2年生は自分の探究テーマがより深まり、学ぶ意味をさらに掘り下げることができ、1年生は2年生をロールモデルに大船渡学の何たるかを学び、自分の好きなことを見出していききっかけとなる。そんな相互作用が生まれています」

### 担任・副担任が総出で取り組む 夏休みの集中探究学習

さらに、7月末には「夏の陣」と呼ばれる年間最大のビッグイベントが控えている。夏休みの5日間を使い、1・2年生の担任・副担任全員が、それぞれの専門性を生かしたゼミを実施し、1・2年生の混合チームでレクチャー・フィールドワーク・ワークショップ・ふりかえりと発表による共有を行う、といった中身の濃い内容だ。各教員は、自分のゼミで何をレクチャーするか、また、どのような魅力があるかなどを事前に生徒たちにプレゼンし、生徒は「なぜ、そのゼミを受講したいか」を記入した志望理由書をもとに、チームビルディングを行う。

「2年生にとっては、ファシリテーターに付いてもら

って取り組む2年間の大船渡学の節目であり、地域のパートナーと実践する探究活動につなげる重要なイベントです。また、2年生の発表のお手伝いをする1年生は、『来年はこれを自分たちがやるのか』と身が引き締まり、秋から始まる学年単位の探究学習へ向けての大事なステップとなります。もちろん、ゼミを受け持つ教員にとっても大仕事です。

夏の陣は、夏休みの課外授業の代わりに行っています。夏休みのわずか5日間の課外授業で、学力が身につくわけでもないのに、学びに向かう姿勢が身についたほうがよいと考えています。『このイベントを機に本当にやりたいことが見つかる生徒が多く出てくる可能性もある。それが生徒たちの学びに向かう姿勢につながればいいのではないかと、全教員が納得して取り組んでいます。毎日4時間、5日間連続ですから、生徒たちはかなり頭が疲れるようです」

夏の陣の最終日の発表は一般公開されており、例年、東北の公立高校を中心に全国から30~40名の他校教員が大船渡高校へ視察に訪れる。今年度は私立高校の生徒・教員を含め、およそ90名の見学者が来校する予定だという。

### 自問自答の繰り返しによって 課題を発見する過程が重要

「大船渡学」で最も力点を置かれているのが、「問い」を立てる力の育成だ。探究学習というと、課題解決に向かう活動が多いが、「大船渡学」では、課題解決をゴールにしていない。「問い」を立てることによって浮かび上がる「課題の発見」、ここが探究のポイントであると、小田島先生は考えている。

「生徒たちには『解決できなくてもいいんだよ。そこは、大学に進学してから研究を続けられるといいよね。課題が見つかったら、さらに新しい問いが出てくるから、どんどん自問自答しよう』と言っています」

1年次の授業では、まず教員が具体的な「問い」を提示し、生徒一人ひとりが自分なりの意見を披露する。その意見に対して、4人1組でいくつものクリティカルな「問い出し」をさせるのが、授業の基本スタイルだ。

「その際に、ルールを設けています。プレゼンした生徒は他の生徒から“問い出し”されても絶対に答えないこ



と。問われた内容をメモに取り、必ず後でそれらについて自問自答してみるのが約束事です。答えさせないことにより、チームの仲間は発表者を追い詰めることなく、よりクリティカルな問いを遠慮なく打ち出せるし、プレゼンした側はじっくりと自問自答することによって、次のプレゼンがブラッシュアップされるとともに、“問い出し”をする立場に回ったときに的確で鋭い問いを繰り出す訓練になるからです。その繰り返しの中で“問い”が深まり、自分が本当に向き合いたい課題が見つければ、それでいいんじゃないか。見つからなければそれでもいいと思っていますが、大抵の場合、2年生の中頃までには、やりたい探究のテーマが見つかるものです。

かなり根気のいる授業ですから、生徒には『頭を使って疲れるし、面倒くさいし、超イヤだ』と言われるそうですが、3年生になり、大学の志望理由書を書くころになって、『大船渡学に比べたら楽勝だ』と言う生徒や、合格体験記に『大船渡学をやっておいてよかった』と書く生徒が後を絶ちません」

### 好きなことに取り組む探究活動で 地域の誰かを笑顔にする「大船渡学」

2年生では、地域をフィールドとして具体的なアクションを起こす探究活動がメインとなる。冒頭で、地域を学ぶのではなく、自分の興味・関心や好きなことを活動に移すことで、地域の誰かを笑顔にするのが大船渡学と記したが、具体的にどのような活動がそれに相当するのだろうか。小田島先生の印象に残っている活動事例を以下に要約して紹介する。

#### 【事例1：戦争体験を語り継ぐ】

祖母との会話をきっかけに、戦争の体験を語り継ぎたいと考えた生徒がいた。戦争を体験した大船渡市民の高齢者を集めて取材したり、ネットワークを世界に広げ、日本の植民地支配を経験した親を持つ子ども世代のアジア人にもオンラインでインタビューし、日本に対する複雑な思いについても勇気を出して切り込んだ。戦争と平和について考える学生団体を立ち上げ、補助金も獲得。「岩手県ユネスコ連絡協議会」からも表彰された。卒業後は立教大学に進学し、現在も活動を続けている。

#### 【事例2：無人バスをお年寄りの足に】

大学は工学部に進んで将来はバス会社に就職したいと希望するほど、無類のバス愛好家だった男子生徒が、東日本大震災で甚大な被害を受けたJR気仙沼線と大船渡線に代わるBRT（バス高速輸送システム）に着眼。岩手県沿岸南部の地区ごとの車の免許返納率の現況を調査し、地域の高齢者の足としてBRTをうまく活用できないかと、「仮説」を立てて研究発表を行った。

「そのバス好き男子のプレゼンを見た後輩たちが、彼の探究活動を引き継ぎ、実際に市役所に相談を持ちかけるなどしてアクションを起こしたのです。異学年がコラボレーションする授業スタイルが、とてもいい形で功を奏した好例でしょう。また、本校では『地域への貢献は意識しなくていいから、自分が好きなこと、興味のあることを第一に考えて探究のテーマを見つけなさい』と生徒に言っていますが、最終的にどうなるかというところ、自分たちの身近に転がっている課題を探し始めるんですよ。自分がやりたいことで誰を幸せにしたいのか？ その答えは、気仙地区の人たちを笑顔にしたい、自分を育ててくれたこの街を豊かにしたい、というところに自然と落ち着くのだらうと思いますね」

### 学校の特色化・魅力化の本質は 輝く生徒の育成

「大船渡学」を中心に、特色ある教育を実践している大船渡高校。最後に、各高校が特色化・魅力化を推進する秘訣をうかがった。

「生徒との『対話』を重ねることだと思います。『対話』を軸にした伴走を徹底すると、その生徒の様子から学校の特徴が見えてきます。大船渡学の場合、教室の授業でも学年全体の発表会でも、生徒がワチャワチャしている隙間を縫うように先生たちが自由に歩いて回る、そういうスタイルです。大船渡学の仕組みを真似していただきつつ、生徒たちの反応や姿からその学校独自のスタイルを見つけていけばよいと思います」

探究を深めるほどに生徒の人間性は輝きを増す。「学校の魅力とは詰まるところ、生徒たちの輝きで成り立っているのかもしれない」と小田島先生は言葉を添えた。